

ロレンスにおける「英国性」脱却の試み

Lawrence's Attempt to Transcend "Englishness"

中山本文

Lawrence's main purpose in writing novels, especially stories after *Women in Love*, is the attempt to get out of our present life into another. Among them, *Women in Love* shows the greatest effort to break free from an old life in the struggle to enter a new one.

For Lawrence, living a true life meant to enter into another, leaving the old shell. In *Women in Love*, *Aaron's Rod*, *Kangaroo*, *The Plumed Serpent*, and *The Man Who Died*, each protagonist struggles to find another way of life, and at the same time endeavors to escape from many kinds of restraints such as old customs, tradition, or social systems. Several of them, just like Lawrence himself, even leaves their own countries; others abandon their families. Take Birkin in *Women in Love*, for example. Although he is a school inspector, he lives alone in a mill having no house to live in. He acts and speaks freely, and is not rooted anywhere. Here is also a woman called Ursula who tries to overcome the old bonds.

The cardinal discussion here is to examine how they attempt to get out of their old bodies.

はじめに

ロレンスは *Studies in Classic American Literature* のメルヴィル (Herman Melville) 論の中でこう書いている。

Anywhere, anywhere out of our world. To get away. To get out, out! To get away, out of our life. To cross a horizon into another life. No matter what life, so long as it is another life. Away, away from humanity. To the sea. The naked, salt, elemental sea. To go to sea, to escape humanity. (SCAL, 42)

ロレンスにとって真の意味で生きるとは、我々の今の生活から脱出して別の生活に入ることであっ

た。古い生活の殻を脱ぎ捨て、新しい生活に入ることであった。*Women in Love*, *Aaron's Rod*, *The Plumed Serpent*, *Lady Chatterley's Lover*, *The Man Who Died* の主人公たちはそれぞれに新しい生活を求めて彷徨する。彼らは社会の慣習・伝統・組織、そして一般大衆といった、自らを束縛し、規制するあらゆるものから逃れようとする。ロレンス自身がそうであったように、彼らの中には国を捨てるものもいる。自分の仕事を捨てるものもいれば、あるものは家族をすら捨てる。何がそうさせるのか。

中でもその脱出の大いなる試みの物語として、*Women in Love* は実に興味深い。バーキン視学官だが、出生も分からなければ、家族もいない。住む家も無く、水門の近くの番小屋を借りて暮らしている。行動も言動も極めて自由で、何処にも根ざしていないし、何ものにも縛られていない。社会の中で浮遊するかのようになっている、いわば、遊民である。その点で、下級貴族として、社会の枠の中で、規律と伝統を重んじながら生きているジェラルドと対照的である。そのほかにここには、自らのうちに何かが生起しつつあると感じているアーシュラや、バーキンの友人のボヘミアンたちがいて、それぞれに既成の枠に疑問を感じ、それを乗り越えようとしている。

ここではバーキンをはじめ、アーシュラや他のボヘミアンたちに注目して、彼らがいかに脱出を試みるかを検討したい。

I

既成の秩序に対する拒絶の精神はバーキンに顕著に見られる。まず、第二章 Shortlands の結婚披露宴の場面である。この小説の展開において重要な位置を占めているジェラルドとの対話に注目してみる。披露宴の場面で、ジェラルドの妹のローラと新郎の追いかけてこが話題になった時の事である。その話題はジェラルドとバーキンの世間の "standard" についての議論にまで発展する。この話を聞いたジェラルドはあまりいい顔をしなない。いかにも "sense of the family dignity" (WL, 32) を傷つけられたかのようなのである。ジェラルドは妹の非常識な行動に批判的で、無軌道な彼女の行為を責める。一方、バーキンはジェラルドと正反対の立場で、衝動的な行動こそ、今人間にとって最も欠けているものだといった考えを主張し、彼の妹の行為を賞賛する。

バーキンには確かにボヘミアン的なところがあるが、伝統や秩序を徹頭徹尾否定しているのではない。どこか楽天的なところがあり、適度に伝統的でもある。例えば、第一章の Sisters である。伝統的な儀式に疑問をもちながらも、一人の社会人として、社会が作り出したひとつの役割である、「視学官」を引き受けて生きている。そういう立場もあるのか、ジェラルドの父に頼まれて、不本意ながらも新郎の介添え役を引き受けている。

Birkin was as thin as Mr Crich, pale and ill-looking. His face was narrow but nicely made.... Although he was dressed correctly for his part, yet there was an

innate incongruity which caused a slight ridiculousness in his appearance. His nature was clever and separate, he did not fit at all in the conventional occasion. Yet he subordinated himself to the common idea, travestied himself. (WL, 20)

ここには主人公の、"separate"であることを好む性質、"conventional occasion"や"common idea"に馴染めない性質が明らかにされている。"conventional"なもの、"common"なものを嫌ったり、またそれらに違和感を覚えながらも、常識的に生きている彼の姿がここにはある。しかし、無理をして自分を世間の常識に合わせて正装しているから、外見上"ridiculous"になってしまう。彼が周囲につかみ所のない、不安定な人間という印象を与えてしまうのはそのためだ。"unconventional"な性質を多分にもつ彼は意識的に普通の人間のふりをして生きている。

しかしながら、常識的な行為こそ、良識ある人間のとるべき行為であり、それが社会の秩序・安寧に不可欠の要素だと信じているジェラルドはバーキンの主張を受け入れない。"standard"がなければ、世の中は乱れ、人々は無秩序の恐怖に曝される事になるというところに彼の論点はある。しかし、バーキンは人々が自分本来の行動が出来なくなっているのはこの"standard"の抑圧に原因があるのではないかと考えている。確かに、"common ruck" (WL, 32)には必要だが、"anybody who is anything" (WL, 32)には不要である。人はもっと自分の内に生ずる衝動に"spontaneously" (WL, 32)に従うべきだと、譲らない。明らかに、バーキンは"standard"という社会の基準・枠という抑圧からの解放を求めている。生まれた時から秩序を重んじる世界で教育を受けてきたジェラルドにはバーキンの考えは納得できない。しかし、彼が何か自分の知らない世界に通じていることは感じ取っている。自分とは異なる世界に生きている人間だと認識しながらも、魅惑されるのはそこに理由がある。

貴族という家柄からくる体面の意識に囚われている彼にしてみれば、すべてのものはきれいに秩序正しく、紳士的に行われなければならない。新婦を追っかける衝動に駆られたラプトンにジェラルドは忠告する。

If you're doing a thing, do it properly, and if you're not going to do it properly, leave it alone. (WL, 32)

ここに明らかなように、彼にとって重要なのは、他人にとって「適切」な行為に見えるかどうか、世間の目に照らしてそれが「適切」で、不恰好でないかどうかということ。彼の判断の基準はこの一点にある。このように、ジェラルドは自分の世界の"standard"を離れて思考し行動することができない。彼は"standard of behaviour" (WL, 32)を信じて何の疑いも持っていない。その意味では、彼は"the collective self" (WL, 33)を生きることしか出来ない、"solitary self"をもち得ない人物である。新郎新婦の思いがけない行動を面白がっているバーキンにジェラルド

は我慢がならない。—"You don't believe in having any standard of behaviour at all, do you?" (WL, 32)

このように、あくまで "standard" に拘泥するジェラルドに対するバーキンの発言はこの作品における作者の問題意識と作品の意図を雄弁に物語っている。

"... I think it was perfect good form in Laura to bolt from Lupton to the church door. It was almost a masterpiece in good form. It's the hardest thing in the world to act spontaneously on one's impulses—and it's the only really gentlemanly thing to do—provided you're fit to do it." (WL, 32)

二人のこのやりとりで注意しなければならないのは、実際ジェラルド自身が "We should have everybody cutting everybody else's throat in five minutes." (WL, 33) と不安を吐露しているように、バーキンは誰でも自分勝手に人の命を奪っていいなどと言っているのではなく、我々は人間として、一人の個人として "the purely individual thing in themselves" (WL, 33) の尊厳にもっと注意を払うべきだと言っているのだ。バーキン自身を含め、個人の生が社会に従属せしめられ、社会的に集団的に生きる事が当たり前になってしまっている現実に対する不満と苛立ちがここにはある。Minoという章で、バーキンが繰り返し "impersonal" (WL, 148) な「個」の重要性を強調していることで明らかなように、彼がジェラルドに向かって主張しているのは「個の尊厳」に他ならない。

II

バーキンのこういった特徴は第三章の、ハーマイオニとの教育をめぐる議論に明らかにされている。ここでの議論は、バーキンの "spontaneous conduct" をめぐる第二章の議論と関わっていて実に興味深い。彼女の教育論は以下の言葉に要約されている。

"never carried away, out of themselves, always conscious, always self-conscious, always aware of themselves...." isn't it our death? Doesn't it destroy all our spontaneity, all our instincts? Are not the young people growing up today, really dead before they have a chance to live?" (WL, 41)

彼女の批判は教育のはらむ深刻な問題を言い当てており、またバーキンの第二章の "spontaneous conduct" との関連でも実に興味深い発言である。なるほど、教育は子供の意識を目覚めさせ、時には子供を過度に意識的にし、常に自分を意識し、自分から逃れられなくする。そしてついに

は、自発性や本能を破壊してしまいかねない側面をもっている。ハーマイオニの、この主張はバーキンのそれと酷似しており、読者は混乱させられてしまう。しかし問題は、この発言が主知主義に染まりきったハーマイオニによってなされている点にある。彼女の人物造形は、第二章のバーキンの発言と密接に関わっており、作品の主題の明確化と深化に大いに貢献している。

彼女の主張に対するバーキンの反撃は彼女の問題点を暴きたてるだけでなく、同時にバーキン自身の人物像を更に明確にする。数年にわたるハーマイオニとの同棲生活を通して彼女を知り尽くしている彼の批難の言葉は辛らつを極め、彼女の偽りの衣を一枚一枚剥ぎ取りすっかり裸にしてしまう。

"You are just making words,... knowledge means everything to you. Even your animalism, you want it in your head. You don't want to be an animal, you want to observe your own animal functions, to get a mental thrill out of them....Passion and instincts—you want them hard enough, but under that skull of yours.

Your passion is a lie,... It isn't passion at all, it is your will. It's your bullying will. You want to clutch things and have them in your power.... You and spontaneity! You, the most deliberate thing that ever walked or crawled! You'd be verily deliberately spontaneous—that' you. Because you want to have everything in your volition, your deliberate voluntary consciousness....You want it all in that loathsome little skull of yours,... (WL, 42)

ハーマイオニは "passion" と "instinct" に従って生きることの重要性を熱烈に語るが、バーキンはそこに潜む欺瞞を見抜いている。その欺瞞は、バーキンが価値を置く "spontaneous conduct" と不即不離の関係にある "passion" と "instinct" をハーマイオニが意識で、頭で求めている点にある。もし、彼女が言葉通り、本気でそれらを希求することがあるとしても、それは、バーキンが断言するように、"verily deliberately spontaneous" (WL, 42)なものになるだろう。彼女は自ら主張する "animalism" を自分の頭で求め、自分のその動物的功能を観察することを楽しむだけ。そういうハーマイオニに、バーキンは行き過ぎた "intellectualism" の最悪の形態を見とめている。アーシュラの "How can you have knowledge not in your head?" (WL, 43)という問に対して、"In the blood" (WL, 43)と応えるバーキンは「伝統的な知」の呪縛から逃れている。

彼女の教育論はバーキンの激しい攻撃に遭うが、ハーマイオニ自身の問題は別として、教育の重要な一面を指摘している。教育は子供たちに広くものを見る英知を与え、小さな自分を大きな自分へと導く手がかりを与えるべきはずのものであるのだが、時としてそれは逆に、単に、バーキンの言う、"knowledge of things concluded, in the past" (WL, 86)だけを与えることに終

始する。学校が知識を供給するだけの機関になり、それを要領よく、できるだけ多く吸収することのみを子供に求めれば、子供たちは今まで創造されていない知を自ら発見したり、創造したりすることはない。子供たちは過去の知識を所有することのみに喜びを覚え、過去の基準で物事を判断し、そこに満足するようになる。ハーマイオニに見られるように、過去の知識をふやすことのみが人生の目的になってしまう。創造的な関係を樹立し、自らを常に広く、豊かに生きる衝動が生まれるはずがない。新たな何かが生まれる契機を失わせることにはなっても、決してその逆ではない。新たな関係の萌芽を期待することは極めて困難にならざるを得ない。パーキンの "knowledge of things concluded" ということばはそのことを暗示している。ロレンスの SNAKE という詩は教育のそういう一面を見事に突いている。

ある暑い日の昼に一匹の蛇が語り手の水のみ場に来ている。最初、語り手は "I ... must wait, must stand and wait, for there he was at the trough before me." (WL, 349) と思うが、しばらく蛇の様子を見ているうちに、"He must be killed" (CPD, 350) と "The voice of my education" に命じられる。不意に丸太を拾ってその水のみ場目掛けて投げつける。蛇は体をくねらせ、土堀の割れ目に姿を消す。

And immediately I regretted it.

I thought how paltry, how vulgar, what a mean act!

I despised myself and the voices of my accursed human education.

And I thought of the albatross,

And I wished he would come back, my snake.

For he seemed to me again like a king,

Like a king in exile, uncrowned in the underworld,

Now due to be crowned again.

And so, I missed my chance with one of the lords Of life.

And I have something to expiate;

A pettiness. (CPD, 351)

彼の内なる「教育の声」が "a guest" (CPD, 350) として受け入れたかもしれない蛇を追い払ったのだ。関係の可能性があったにも拘らず、「私」は「小さな自己」へと追い立てられ、再び "one of the lords of life" に会う機会を失い、同時に、自らも "one of the lords of life" になる機会を失った。教育が語り手に "pettiness" を植えつけ、他者を受け入れることによって「大いなる個」へ変容する可能性を奪ったのだ。教育が与える「知」の獲得に人生の喜びを見出しているハーマイオニは、「教育の声」に衝き動かされてつい蛇に向かって丸太を投げてしまった「私」と重なる。彼女の "animalism" は最初に感じた "I ... must wait" という気持ちを、"He

must be killed" と命令を下す、知的に意識化された "animalism" に他ならない。もはや、あるがままに生きることができなくなってしまった知識人の悲劇をハーマイオニに見ているのだ。バーキンは言う、"We are too full of ourselves." (WL, 44) この言葉は我々が個別化して、すっかり「小さな個」に閉じこもっていることへの痛烈な批判である。我々はもはや自分でしかない。自らを広大な世界へ誘う関係の生起する余地がないほど「自分」でいっぱいになっている。

"intellectualism" は方向を間違えると、極めて人間的な、"delicate" な部分まで侵食し、それを意識の領域に引きずり込み、すべてを視覚的に "observe" するようにしてしまう。その結果、深奥の部分を知るみに引きずり出し、視覚的な意識の中に取り込むようになる。深奥をありのままに生きるのではなく、それを意識化して間接的に生きるしかできなくなっている当時のイギリス人の誤謬がここで批難されているのだ。バーキンは第八章 Breadalby の最後の数ページで明らかにされているように、裸で森の中をころげ回り、素肌に植物の生気を受け止め、それが自分の血管に限なく伝わり、ついには自分が限りなく "enriched" (WL, 107) だと感じる男である。また Mino という章で、Mino という雄猫がメスの野良猫を撃退し自分に従わせようとする場面があり、バーキンはそこに Mino のある「衝動」(本能) を認め、その行為を賞賛する。もっともここに居合わせたアーシュラから、Mino は単に弱いものいじめをやっているだけだという反論が帰っては来るが。ここで注意したいのは、アーシュラの批判の立脚点が "impulse" (WL, 32) ではなく、表に顕れた行為そのものにあるということ。つまり、視覚的な認識による判断だということである。そういう意味では彼女も "sensuous" な類型に属する人物だということになる。更に、バーキンの特質はジェラルドとの例の有名な格闘の場面に見られる。二人は疲れ果てて床に横たわっている。

He put out his hand to steady himself. It touched the hand of Gerald, that was lying out on the floor. And Gerard's hand closed warm and sudden over Birkin's, they remained exhausted and breathless, the one hand clasped closely over the other. It was Birkin whose hand, in swift response, had closed in a strong, warm clasp over the hand of the other. Gerald's clasp had been sudden and momentaneous. (WL, 272)

彼はふと無意識にジェラルドの手に自分の手を重ね、相手の手を強く握り締めるが、ジェラルドの握りは "sudden and momentaneous" に終わる。しかし、ジェラルドはこの格闘によって、"freer and more open" (p.273) な気分になっている。バーキンのこの申し出は二人でレスリングをやった後に、何気なく自分の "impulse" に従ってなされたもの。これを、ジェラルドは頭で理解で拒んだ。やはりここにも、彼の "sensuous" な側面を認めないわけにはいかない。ここにバーキンとジェラルドの根本的な違いがある。

またバーキンの特異性は第七章 Fetishの土人の彫刻についての議論にも見られる。どこか南洋あたりの木彫りで、奇妙なポーズをした裸の女で、腹を突き出して苦悶している。どうもしゃがんで子供を産もうとしているらしい。全身に力が入るように首にかけた帯の両端を左右の手で掴み、奇妙にしがみつくような格好でうずくまっている。知的な意識を超えた肉体的衝動の極限を暗示している。たまたまロンドンで、バーキンの友人で、彼と同じくボヘミアンのハリディーという男のアパートに泊まることになったジェラルドは偶然この彫刻に目を留める。この時、彼の目には "rather obscene" (WL, 74) と映る。翌朝、たまたまジェラルドはこの同じ彫刻をバーキンとともに見ることになり、彼の意見を求める。すると、バーキンの反応はジェラルドの予想とは反対に "It is art" (WL, 78) と返って来る。

"Why it is art?" Gerald asked, shocked, resentful. "It conveys a complete truth," said Birkin. "It contains the whole truth of that state, whatever you feel about it." But you can't call it *high* art," said Gerald.... "Pure culture in sensation, culture in the physical consciousness, really *ultimate* physical consciousness, mindless, utterly sensual. It is so sensual as to be final, supreme. (WL, 79)

物事を "standard" で判断するジェラルドにとっては、あらゆるものは洗練されていなければならない。彼は "the sheer African thing" を嫌悪していた。彼の "standard" からすれば、この彫刻は "obscene" ということになり、決して "high art" ではない。だから、最初この彫刻を見たときの彼の態度は "disapproving" (WL, 74) になる。ジェラルドは "naked" で "grotesque" なものは好まず、 "certain ideas like clothing" (WL, 79) を求める。

ところが一方、あらゆる standard の呪縛から自らを解放し、衝動に従って自由に行動することの価値を信じているバーキンはこの彫像に "culture in the physical consciousness" を認め、 "mindless" で "utterly sensual" だと賞賛する。ジェラルドがハーマイオニと同じく "sensuous" な次元で生きているのに対してバーキンは "sensual" な次元で生きている。

III

この物語は、明らかに、バーキンの認識に対するアーシュラをはじめとする周囲の反応という形で展開されている。アーシュラはバーキンの言う "sensual" な世界が納得できてはいないが、ハーマイオニとは異なる人物である。彼女は "the brightness of an essential flame" (WL p.9) を内に秘めている。まだ明確な形を成してはいないが、人生を自分なりに把握しようと努めている。既成の状況に居心地の悪さと、苛立ちにも近い不満がある。彼女にとっては、家は "the sordid, too-familiar place!" と感じられ、ここでの生活は "obsolete" (WL, 9) 以外の何もので

もなかった。彼女にはオースティン (Jane Austen) の描く主人公たちのように、結婚によって一歩前進するという考えはない。明らかに彼女の目は現実の世界から別の世界を見ている。

彼女の特質は第19章Moonyにも示されている。ここでは彼女の、周囲への嫌悪感はさらに増幅されている。魂の底から、人々を、大人たちを軽蔑し、嫌悪している。大人たちは「社会的」に存在することに慣れすぎていて、醜悪な社会の渥が身に染み付いている。自分というものの実在がどこにも見出せない。本当の意味で自分を生きるために、今アーシュラに必要なのは「非社会的」に存在すること。子どもや動物はただ自分のためにのみ生きている。彼らには厭うべき社会的な原理というものが無い。彼女がそれらを愛するのはそのために他ならない。例えば、Woman to Womanという章に見られる、バーキンの結婚観に対するアーシュラの反応である。彼は自分のうちの"demon"で交わることを求めている。しかし、この交わりは肉体的なものではない。またここには人間的な感情も介在してこない。「自分のうちの未知なるもの」を相手を受け入れることを求めている。既成の社会の枠の中で生きること慣れきっているものには、彼の言葉や態度は不安定で、心もとなく、信用できない。ハーマイオニによると、バーキンは何か古い系譜に属する人間である。

Marriage or Notという章でバーキンの結婚観が明らかにされている。彼は従来の法律上の結婚に興味を持っていない。その理由は、二人で「小さな家」に住み、「小さな利益」の追求に汲々としている、そのあり方に未来がないと思っているからである。二人だけの小さな幸せを追求する「家庭本能」を避けたいと思っている。愛や結婚が二人だけの、他者が介在しない狭隘な世界になりきってしまったところに彼の不満がある。排他的な、窮屈な世界。彼は"something broader" (WL, 352) を求めている。それは、バーキンによれば、「男女の永遠の結合」によって到達できる境地。しかし、彼はこの結合を人間間にある唯一のものと捉えてはいない。"some broader relationship" (WL, 352) は二人を閉じ込める結合ではなく、むしろ別の結合を生み出す契機となる。ジェラルドとの格闘の後、不思議な開放感にひたりながらバーキンは言う。"One should enjoy what is given." (WL, 273) 彼は一定の関係にお互いを束縛し合うような関係を否定する。しかし、アーシュラに彼の思いは伝わらない。相変わらず彼女は二人だけの関係を求める。そこに二人の葛藤の原因がある。バーキンは社会的な観念が人に強いる宿命に従おうとはしない。彼の視線はこの宿命の彼方に向けられている。彼は、いわば、既成の秩序の及ばない世界に生きる事を願っている。

バーキンは、ジェラルドにもこの世界で生きることを意味を説くが、彼らにはたやすく秩序の殻を脱ぎ捨てることはできない。むしろジェラルドは自ら進んでその宿命を生きようとする。彼の求める関係は、バーキンのそれとは違って、広がりにはではなく、閉じる方向に向かう。彼の求める関係はいつも独善的で、その中心には彼だけが存在する。彼には関係の中に自らを投げ出して、魂の奥底で純粋に結びつくことが出来ない。グドルーンとの破局も実はそこに原因があった。彼にとって、結婚という関係はお互いが深い結びつきに入ることではない。それは既成の秩序を

受容することであり、ついにはその秩序の支配者になることに他ならない。グドルーンは彼の秩序を受け入れることを拒む。彼女は、ジェラルドが自分の部屋に忍び込んできたあの晩に、彼と結婚する事の意味を理解した。そして物語の最後で二人の離反は決定的となる。

グドルーンは

somebody who would take her in their arms, and hold her to their breast, and give her rest, pure, deep, healing rest... somebody to take her in their arms and fold her safe and perfect, for sleep. (WL, 465)

を求めているのに、彼は "putting to sleep himself" (WL, 465) を求めた。彼が女を求めるのは "to put him to sleep, to give him repose" であり、彼は正に "a child that is famished crying for the breast" (WL, 466) であった。グドルーンにはどこかボヘミア的などころがあり、個人に歯車のような生活を強いる社会を嫌い、世間から家族から逃走する。その意味では、彼女は極めてバーキンに近い。しかし、ジェラルドは自分の宿命に従い、自分の限界のうちに生きることしかできない。彼にはバーキンの言う、神秘的な結婚に自らを委ねることはできない。彼にはその意志が欠如している。バーキンは思う。"—If he pledged himself with the man he would later be able to pledge himself with the woman" (WL, 353) ジェラルドはバーキンの、男女の究極の結合と、それに付随する男と男の完全なる結合の申し出に心が動くが、結局は自分にとって居心地のよい、秩序だった、伝統的な世界に留まる方を選ぶ。より広い、より自由な、「個」の開かれた世界への扉はジェラルドには閉じられたままである。

IV

しかしながら、バーキンのこの開かれた世界は、彼のよき理解者であるべきはずのアーシュラにとっても容易に受入れられるものではない。それほど世間一般の常識的な世界を超えている。第26章のA Chairという章はバーキンという人物とその考えをよく表している。彼は人々が生を生産的に生きることができなくなってしまい、人生を機械的なものにしてしまっていると洞察する。何か他のものになりうる力を失って、すっかり人間が物質的になってしまっている状況をつくり出している原因はその、人生の機械化にあると見ている。

There is no production in us now, only sordid and foul mechanicalness.
... it (i.e. England) had the power to be something other. (WL, 355)

更に、以下の一節にはバーキンの今の私たちの生活を呪詛する激しい気持ちが込められている。

現在の生活を嫌う気持ちは自分の家や家具にまで及ぶ。家や家具は人間を縛る絆となり、自由な精神を拘束する。バーキンの態度は宮殿を捨て、家族を捨て、豊かな生活を捨て、そして苦難の旅路の果てに悟りを開いた仏陀や母の元を去り弟子たちと旅を続けたイエスさながらである。古い絆を断ち切り、もっと自由な世界に生きたいという気持ちは同じでも、さすがにここまで来ると、アーシュラには受け入れられない。彼の逃走の精神は家すらも持つことを否定する。「どこかに」(somewhere) 住まなければならないと思うアーシュラと、住むところは「何処でも」(anywhere) 構わないと思うバーキン。

"The thought of a house and furniture of my own is hateful to me."... "—But one must live somewhere."

"Not somewhere —anywhere, "he said." One should just live anywhere —not have a definite place. I don't want a definite place. —As soon as you get a room, and it is *complete*, you want to run from it. —Now my rooms at the Mill are quite complete, I want them at the bottom of the sea. It is a horrible tyranny of a fixed milieu, where each piece of furniture is a commandment-stone." (WL, 356)

バーキンは生活を規定し固定してしまうあらゆるものを否定する。産業革命以来、人々を虜にしてきた物質主義は生活を画一化し、支配している。人々は豊かな安定した豊かな生活を求める。ところが、一旦その生活が完成されると、生は限定され、活力を失ってしまう。そこにバーキンが、かつてカーライル (Thomas Carlyle) がヴィクトリアニズムを批判したように、"the accursed present" (WL, 356) に対して声高に不快を口にする理由がある。彼は常に、ある何かを求めて進行している過程そのものに価値を見出す。このバーキンの主張は *ART And MORALITY* の一節を思い出させる。

Each thing, living or unliving, streams in its own odd, intertwining flux, and nothing, not even man nor the God of man, nor anything that man has thought or felt or known, is fixed or abiding. All moves. And nothing is true, or good, or right, except in its own living relatedness to its own circumambient universe; to the things that are in the stream with it. (AM, 16)

これはバーキンの逃走の意味を実に雄弁に語っている。正にここにこそ、バーキンが "standard" を否定し、伝統的な愛の観念を嫌悪し、人間を規制するあらゆるものを批判する理由がある。バーキンはアーシュラに生気をなくしてしまった「過去」を捨てて、広い大地を放浪することを提案する。"—we will wander about on the surface of the earth" (WL, 362) 結婚によって、

「過去」のあらゆるものから解放されることを期待する点で、アーシュラの思いはバーキンのそれに極めて近い。しかし、バーキンにとって、結婚はそれだけに留まらない。

"I don't want to inherit the earth," she said. "I don't want to inherit anything." He closed his hand over hers. "Neither do I. I want to be disinherited." She clasped his fingers closely. "We won't care about *anything*," she said. He sat still, and laughed.

"And we'll be married, and have done with them," she added. —Again he laughed. "It's one way of getting rid of everything," she said, "to get married." "And one way of accepting the whole world," he added. (WL, 362)

アーシュラにとって結婚は全てと手を切る手段であるのに対して、バーキンにとって結婚は、同時に "the whole world" を受け入れるひとつの方法でもある。上記の対話の続きでも明らかのように、彼女が求めるのは二人だけの世界であるのに対して、彼はその世界にその他の少数の人間——ジェラルドやグドルーン——を加えようとしている。彼は数人の他人と一緒にいる時、本当の幸福があるという。結婚を他の全てと手を切る手段と捉えるアーシュラには納得できない。従って、二人の気持ちの齟齬はこの物語の最後の最後まで続く。バーキンは、確かに結婚のある開かれた世界への参入の契機と捉えている。しかしそれだけに留まらず、物語の最後でアーシュラに語るように、彼は自分の生を十全に生きるためにジェラルドとの友情関係も求めている。ここに彼の脱出・逃走の特徴がある。—"We should enjoy what is given." (WL, 273)

おわりに

第一章Sistersでの「結婚」についての二人の冷めた会話に示されているように、この作品は人間関係に極めて悲観的である。またThe Water-partyでは、バーキンはジェラルドの妹の水死事故について、彼女の死を肯定する発言をし、その彼の非情な言葉は人間嫌悪の思いの深さを思い知らされる。そして更に、同じこの章には "the black river of corruption" (WL, 172) にのた打ち回っているのはジェラルドやグドルーンばかりでなく、自分やアーシュラもある意味ではそうだというバーキンの終末論的発言までである。このようにこの作品は現世否定の言説に事欠かない。第一次世界大戦や、その後の混乱や大英帝国の衰退、人間疎外の状況を引き起こす要因となった産業化の進展による社会状況の変化など歴史的背景が登場人物たちの言動に影響していることに疑問の余地がない。しかし、ロレンスは絶望してただ手をこまねいているのではない。"the black river of corruption" の後に "a new cycle of creation" (WL, 173) が始まることを期待している。彼は "if one were to move forwards, one must break a way through" (WL,

186)であることを十分に認識している。

If only one might create the future after one's own heart—for a little pure truth, a little unflinching application of simple truth to life, the heart cried out ceaselessly. (WL, 97)

この小説はいかにして我々が "the old body" を脱ぎ捨て、"create the future after one's own heart" するかという、脱出の試みの物語である。

Works Cited

1. D.H Lawrence, *Studies in Classic American Literature*, eds. Ezra Greenspan, Lindeth Vasey and John Worthen (Cambridge: Cambridge UP, 2003)
2. D.H Lawrence, *Women in Love*, eds. David Farmer, Lindeth Vasey & John Worthen (Cambridge: Cambridge UP, 1987)
3. D.H Lawrence, *Art and Morality*, contained in *Phoenix: The Posthumous Papers of D.H. Lawrence*, ed. EDWARD D. McDONALD (New York: The Viking Press, 1936)
4. D.H Lawrence, *The Complete Poems of D.H. Lawrence*, eds. VIVIAN DE SOLA PINTO AND WARREN ROBERTS

Bibliography

1. Tony Pinkney, *D.H. Lawrence and Modernism* (Hemel Hempsted: Harvester Wheatsheaf, 1990)
2. Peter Widowson ed., *D.H. Lawrence* (London: Longman, 1992)
3. Michael Bell, *Literature, Modernism and Myth: Belief and Responsibility in the Twentieth Century* (Cambridge: Cambridge UP, 1997)
4. Gilles Deleuze & Claire Parnet, *Dialogues* (Flammarion, 1997)
5. ジル・ドゥルーズ、『批評と臨床』守中高明・谷昌親・鈴木雅大 訳（東京：河出書房新書、2002）